

京都・清凉寺毘沙門天立像
—その造形と製作背景における史的位置について—

東京大学 佐藤 有希子

本発表は、京都・清凉寺に伝来する毘沙門天立像（以下、清凉寺像）について、その造形の意義と製作背景を明らかにしようとするものである。清凉寺像は、かねてより西域風が濃厚とされ、いわゆる「兜跋」の称を冠した京都・東寺の毘沙門天立像（以下、東寺像）の忠実な模刻作品として知られてきたが、その造立の経緯を論じた研究は数少なく、また平安時代彫刻史における位置づけについても不明な点が多い。しかし、実査を踏まえて清凉寺像の表現方法に改めて注目してみると、その彫刻および表面の仕上げはいずれをとっても、当代第一級の仏師による製作をうかがわせるものがある。その視点に立ったとき、単なる模刻作品として語られてきた本像の史的意義は、毘沙門天という尊格特有の問題においてのみならず、平安時代彫刻史においても改めて捉えなおす必要があるといえよう。

本発表では、以下の特質を分析することで清凉寺像の史的位置づけについて考えてみたい。本像は、おそらく東寺像を手本にして造られたため、その図像はもとより像容のすべてを東寺像とほぼ同工にするが、たとえば彫刻としての立体把握やプロポーションには大きな違いが認められる。ことに、清凉寺像のプロポーションは、頭部を小さくつくり、のびやかな肢体をバランスよくまとめあげたところが特徴であるが、このような長身性は 11 世紀前半の六波羅蜜寺・地藏菩薩立像や、同中頃の園城寺・新羅明神坐像などの中央作例と共通している。技法上の特色としては、清凉寺像はその表面に塑土及び木屎を使用していることが第一に挙げられる。冠や甲に施された截金と彩色文様も本作品の造形上の特質として見逃せない。截金は同文様の全盛期をむかえる以前の様相を顕著にしめす重要な例といえる。また、背甲に描かれた蓮華唐草文と腰甲の宝相華唐草文は宋代の植物文様と通じる形態であり、清凉寺像造立における宋代文化の受容のあり様を明示すると考える。

これら表現上の特色を踏まえ、11 世紀前半の製作と推定される清凉寺像の造立背景を考えてみると、寛仁 3 年（1019 年）頃建立された清凉寺との関係が改めてクローズアップされよう。清凉寺は、入宋し、釈迦瑞像を請来した奄然の弟子盛算によって奄然の死後に建立されたが、本発表では本像について、それを前後する時期に、釈迦瑞像及び舍利を守護する役割を担うものとして造立された可能性を考えてみたい。当時、数多くの毘沙門天像を造像した人物として藤原実資が知られるが、彼が清凉寺建立に尽力した有力人物と考えられていることも、ここでの想定を補強する。清凉寺像の造立に際しては、単に独尊の西域風毘沙門天という図像をうつすのみではなく、模刻という手段を選択し、東寺像にその姿を仮託している。その理念的背景には、釈迦瑞像に匹敵し、それにふさわしい「三国伝来」という正統性への積極的な意識が存在したことを浮かびあがらせてみたい。